The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	良いデザインと評価の問題
Author(s)	高安, 啓介
Citation	デザイン理論. 2020, 76, p. 142-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

良いデザインと評価の問題

高安　啓介　大阪大学

デザインの創造をめぐる考察はこれまで活況を呈してきた。イノベーションの掛け声のもと，デザイン思考がいたるところで唱えられたが，ナターシャ・ジェンはいみじくも，デザイン思考をめぐる議論において，何が本当に良いのかを問うような段階が欠けていると批判した。この背景には，新しいものを生み出すための創造の理論がもてはやされてきたのに比して，デザインの評価の前提となる基礎考察への関心がとぼしかった事情もあるだろう。デザイン哲学のなすべき仕事は，一方において創造の理論であり，他方において評価の理論であり，両者はいわば表裏一体の関係にあるのなら，現段階において後者に光を当てて，考察の不均衡を見直さなければならない。

本発表は，良いデザインとは何かを考えるうえで基礎となる価値原理について考察をおこなったうえで，今日のデザインの評価における二つの傾向をあきらかにした。そのひとつは，人間と人間とであれ，製品と製品とであれ，情報と情報とであれ，関係を生み出す仕事がますます評価されるようになっている傾向であり，もうひとつは，環境問題であれ，社会問題であれ，問題にたいして踏み込んだ倫理がもとめられている傾向である。本発表はまた，良いデザインや評価のありかたの問い直しが，学問の仕事であるばかりでなく，デザインの内部でおこなわれうる可能性についても論じた。こうした一連の考察をとおして，微に入りすぎる研究ではとらえられない問題連関をとらえようとした。

評価の基準

良いデザインというとき良いとは，価値すなわち好ましい性質をもつ状態であり，良いデザインとは何らかの価値をもつデザインである。良いデザインの要件となる価値は，デザインの評価の基準となるのだから，最初にその原理をとらえなければならない。良いデザインの要件であり，評価の基準となりうるのは，生産価値であり，実用価値であり，倫理価値であり，美的価値であり，表現価値であり，これら五つの基本価値について検討してはじめて，デザインの評価について論じることができるだろう。

評価の歴史

20 世紀から 21 世紀にかけてのデザイン評価の大きな動向をとらえる一番確実なやりかたは，良いデザインを選定する表彰制度に注目して，制度および評価のしかたの変化をとらえる行きかただろう。なぜなら，良いデザインの概念それ自体，1950 年代から各国で起こったデザイン啓発活動によって広く認識されるようになり，各国の機関によって，優良品の認定がなされたり，優良品の展示がなされたりと，似たような活動が広がったからである。当初これらの啓発活動は，外観の変更をとおして消費をつねに刺激するスタイリングにたいして，近代デザインの実直な考えを浸透させようとする活動だったのであり，良いデザインとして選ばれるのはたいてい近代デザインの理念にかなった簡素な見かけの製品だった。

評価の対象

製品デザインにたいして情報の仕事の重みが増していく傾向は，今に始まったわけでなく 20 世紀後半にすでに進行していたといえるのであり，現代の変化はいわゆる情報化につきない。大きな変化は，20 世紀後半から 21 世紀前半にかけて，デザイナーが個体の出来上がりに満足するのでなく，以前にもまして，個体どうしの関係を問うようになった点にある。すなわち，デザインの名のもと，製品のような個体を生み出す仕事だけでなく，仕組みのような関係を生み出す仕事もますます増えており，評価されるべき対象となっている実態は，近年の日本の G マーク制度にもみられる。

評価の関心

現代のデザインの評価において，仕組みのような関係を生み出す仕事がだんだんと認知されて，評価の対象となっている傾向をみたが，これに加えて，環境問題にたいしても，社会問題にたいしても以前にもまして倫理面での配慮がもとめられている点において，評価の関心もまた変化していることを確認したい。たとえば，衣服の分野においてもエシカルファッションが言われてひさしい。

今日，無数のデザインの名のもとで無数の仕事がおこなわれているが，そのなかでも，社会デザインは，関係を生み出す仕事という点からも，時代の倫理への適合という点からも，両面から評価されるべき実践となっており，社会デザインの考えの浸透こそが，デザイン概念そのものの融解をもたらし，デザインの評価のありかたを変化させている。社会デザインがこの意味において全体の傾向を推し量るための試金石ならば，問われるのは，社会デザインがいかなる意味において関係のデザインであるのか，社会デザインはいかなる倫理の導きに従うのか，社会デザインは従来いかに評価されてきたのか，社会デザインは今後いかに評価されるのかである。

評価の評価

こうした現状認識を得たところで，最後に問いたいのは，評価をどう評価するのかという問題である。すなわち，科学技術の発展とともに私たちは未曾有の事態に直面しているのならば，良いデザインとは何かをたえず問い直し，評価のありかたを根本から見直さなればならない。何かあるものを良いかどうか定める，判定としての評価にたいしては，何が本当に良いのかを問い直すような，批評＝批判としての評価もあるだろう。ただしこれは学問の仕事であるばかりではない。興味深いことに，デザイン自体がそれを試みている場合がある。

批判デザインは，役に立つものを生み出すよりも，物による問いかけによって人々の反省をうながす試みであり，問題の解決ではなく問題の提起によって，公共の議論をかきたてる試みとして知られてきた。批判デザインの系列はそもそも既存の価値そのものを問うので，役に立つ働きを拒んだり，道徳心を逆なでしたり，良いデザインの評価にもとより馴染まず，物による批評という性格をもつ。

一般に，デザインに期待されるのは，役立つものの考案であり，切実な問題の解決だが，目先の必要に気を取られすぎると，既存の大きなシステムに巻き込まれ，世間の考えにしばられ，本当に役立つものが何なのか分からなくなり，根本から問題をとらえられなくなる危険がある。デザインの研究も，デザインの実践も，必然性の連関から一歩でも抜け出して，良いデザインと評価のありかたを反省しなければならないという結論に至った。